



第 4 表

方法 種類	挿 木		接 木			
	挿穂の 長さ	一年間 の伸長	%	接穂の 長さ	一年間 の伸長	挿木の伸 長を100 とした比
杉 (クモトオシ)	27.8	9.8	100	5.5~8	38.8	396
杉 (ウラセバル)	23.8	8.5	100	6.5~9	32.3	380
杉 (アヤスギ)	25.6	8.2	100	5~8.5	29.3	357
精英 樹令38年 センベル セニイア	28.2	1	100	5	12.4	1,240
				5.4	56.9	

4. 考 察

本試験で Metasepouia 粘に杉の接木は活着及び生育も良好であつたが、接木方法及び接木後の管理（特に芽かきを早くやりすぎないこと）如何によつては悪いものもあつた。又品種間でも活着及び生育に相異があることを明らかにした。この接木が今後如何なる生育を示すか、又それが杉の母樹の樹令、穂の状態等によりどの様に変化するかは未知数でこれが採穂母樹造成に活用出来るか否か今後の問題であり、之等の点について順次究明したいと思う。

7. 産地別にみた実生スギの生長経過について

都 城 管 林 署 鐘 ヶ 江 留 雄

1. ま え お き

今回調査した林分は新植当時の記録によれば、母樹の産地に関する試験と同時に国有林産の優良種子配給区域の適否を決定することを目的として、全国の主要産地より林業試験場を通じて種子の配給を受け、熊本管林署大津苗畑にて養成した、2年生苗を産地別に植栽したものである。

植栽後は年々調査を実施して来た処であるが、戦争のため不定期となり、22年の調査を最後に本試験地は廃止となつたものを、その後の経過を知るため今回調査したような次第である。

2. 調査林分の概要

位置 宮崎県北諸県郡三股町 轟木 国有林13た林小班内

第 1 表 植 栽 本 数 の 推 移

区 分	産 地	秋田管内	前橋管内	東京管内	名古屋管内	大阪管内	高知管内	熊本管内	計
		本	本	本	本	本	本	本	
植 付 本 数		300	350	50	35	180	160	68	1,143
14年3月調査		212	291	31	37	131	84	52	828
16年3月調査		209	288	29	27	129	84	49	815
22年1月調査		209	273	7	27	128	84	49	777
31年10月調査		203	266	7	27	128	84	48	763
現 存 率		68	76	14	77	71	53	71	

(註) 東京管内の一部は昭和20年9月の台風により崩壊流失。

植栽年度昭和12年3月，面積0.51ha，地況北向，傾斜20度，基岩，砂岩，広葉樹の伐採跡にして表土

深し，植栽関係，苗間列間共2m，補植，実行せず保有，下刈，6回，つる切2.

第2表 上 長 生 長 の 比 率

区分	産地	秋田管内	前橋管内	東京管内	名古屋管内	大阪管内	高知管内	熊本管内
調査時の平均樹高	14年3月	0.55	0.87	0.95	0.53	0.83	0.90	0.73
	16年3月	1.51	2.32	2.54	1.45	2.06	2.23	1.93
	18年3月	3.37	4.59	5.00	3.20	4.04	4.27	4.13
	22年1月	5.60	7.26	7.79	5.81	7.09	7.08	6.88
	31年10月	10.60	13.50	12.90	11.50	13.13	13.67	13.36
平均生長量		0.56	0.71	0.68	0.61	0.69	0.72	0.70

第3表 肥 大 生 長 の 比 較

区分	産地	秋田管内	前橋管内	東京管内	名古屋管内	大阪管内	高知管内	熊本管内
18年3月調査 31年10月調査 平均生長量	cm	4.9	7.0	7.4	4.2	6.4	7.0	5.9
		14.4	17.7	19.1	15.7	17.6	20.5	19.4
		0.8	0.9	1.0	0.8	0.9	1.1	1.0

第4表 気候帯に依る表日本と裏日本との生長比較

区分	種子の産地	現在本数	昭和31年10月調査			すぎたまばえに対する被害程度
			平均直径	平均樹高	平均葉積	
表日本式気候帯	福島	67	15.6	15.4	0.15	22
	富岡	37	19.7	14.8	0.24	12
	大田原	14	21.4	13.7	0.28	23
	水戸	7	19.1	12.9	0.23	0
	高崎	25	17.6	13.4	0.21	18
	津山	8	15.7	12.5	0.14	38
	山崎	21	20.0	13.6	0.25	33
	龜山	33	20.9	14.2	0.28	12
	奈良	24	16.4	12.4	0.17	7
	広島	19	19.5	14.3	0.24	2
	松山	5	18.4	13.2	0.20	28
	馬路	13	20.7	14.0	0.25	25
	魚梁瀬	13	21.7	14.2	0.29	34
	野根	23	20.2	13.6	0.26	13
	奈良	11	17.5	13.0	0.21	65
	本山	11	26.5	15.0	0.43	22
	宇和島	8	18.2	12.7	0.21	34
直方	36	18.8	12.6	0.22	29	
熊本	10	19.4	13.5	0.23	45	
大分	2	20.0	14.0	0.26	5	
計		387	387.5	273.0	4.75	437
平均			19.4	13.7	0.24	22

裏日本式気候帯	白沢	28	14.3	10.3	0.11	66	
	七座	33	13.8	10.4	0.10	82	
	上小阿仁	42	13.2	10.2	0.09	83	
	秋田	34	14.7	10.9	0.12	68	
	大曲	37	14.1	10.3	0.10	79	
	真室川	29	16.4	11.5	0.16	79	
	新発田	66	16.3	11.9	0.15	85	
	喜多方	36	15.4	11.8	0.15	88	
	高田	21	18.1	13.5	0.20	2	
	富山	27	15.7	11.5	0.14	70	
	金沢	6	15.0	13.0	0.14	60	
	鳥取	17	15.6	11.9	0.16	32	
	計		376	182.6	137.2	1.62	794
	平均			15.2	11.4	0.14	66

(註) 表日本式と裏日本式気候帯の区分は福井英一郎著「日本の気候」による。

3. 植栽後の経過

第1表で明かの如く何かの原因で苗木の活着が余りよくなかつたことと，新植後補植が実行されなかつたことは林分構成上，多少の影響があつたかも知れないが，現在のうづ閉関係は余り不同のあるものとは認め難い。

種子の産地により，これを検討すれば第2表，第3表の通りで，産地別にみて例外的な生長を示すものもあるが，概括的に考察すると東北地方に進むにつれて

生長量が低下して行くことであり、第4表の如く気候地帯の区分により検討すると表日本式気候地帯が裏日本式気候地帯に遙かに優つていることが明らかとなり、特に高知管内産のものが良好な成績であることが目立っている。またスギタマバエの被害に対する程度からしても表日本産のものが良好である。

4. む す び

これ等の結果よりみて今後伐期までに晩生形の品種があつて生長量の増大するものがある場合も予想されるが、本試験の目的である産地別の生長の優劣と、これに伴う種子の配給範囲にも限界のあることが一応判明して来たということができると思う。

8. 九州における Podzolic soil について

熊本営林局 明石諫男・谷口吉信・阪本 靖

1. Podzolic soil の概念

成帯土壌としての Podzolic soil については、古くから多くの研究が報告されている。この土壌は、いわゆる寒温帯地方のおもな土壌であつて、ソビエトにおける土壌学、とくに土壌型分類の草分けとなつた土壌とされている。

寒冷多湿な気候条件下では、腐植の分解が種々の面で阻害され、ために生じた腐植酸によつて、土壌上層部の塩基、ついで鉄化合物、礬土化合物が溶脱され、下方にそれらの化合物が集積する、いわゆるポドソール化作用が行われる。

Podzolic soil には、落葉層 (A₀ 層)、溶脱層 (A 層)、集積層 (B 層)、の三層が生成される。

従来 Podzolic soil は、わが国では中部、山陰以北および四国の一部に分布することが知られていたが、ここには九州地方の Podzolic soil の分布と、内大臣国有林における実例を報告するものである。

2 九州における Podzolic soil の分布と性質

最近まで、九州における Podzolic soil はきわめて稀で、わずかに宮崎県の西都営林署部内吹山国有林のコウヤマキ天然生林下にみられる程度であつた。この土壌は、中生紀層の砂岩粘板岩上にあつて、急斜面の岩石地である。

また農林省林業試験場の前田技官の調査では、屋久島の高所でも Podzolic soil がみられることが報告されている。

われわれは、昭和31年9月から12月にかけて、熊本県の矢部営林署部内の土壌調査を実施し、比較的広汎な Podzolic soil が内大臣国有林に分布することをみとめた。その概況は後述のとおりであるが、現在ま

で九州でみられた Podzolic soil は以上の3ヶ所と考えられる。

これらの出現場所を検討してみると、九州地方における Podzolic soil の分布は、おおよそつぎのように考えることができる。

- a. 最も出現の可能性の大きいのは、九州中央山脈中、比較的森林植生の破壊されていない白髪岳から祖母山に至る主要稜線部で、海拔約 800m 以上の地域である。
- b. 比較的海拔高は低いが、コウヤマキ、モミツガの

第1図 九州における Podzolic Soil の分布

